

安次富絹枝さん

1932(昭和12)年7月12日生まれ

民間人

戦地 ギーザバンタ(現八重瀬町)



戦争末期になったころ、この方は学校の先生でしたけどね、みんなにね、「もうアメリカ兵がそこまで来てるから、みんな摩文仁に逃げなさい」って触れて回ったんですよ。もうどーっとむこうに移動したんですよ、みんな。(※これにより玉城(現南城市)から、より危険な摩文仁に移動してしまった。)

●ギーザバンタ(慶座絶壁)

そこで何日過ごしたか分かんないけど、もうここは激戦地になってるから、今度は北の方に移動するからってことで、夜、ギーザバンタっていう絶壁を降りて、そこはすすきのちょっとしたのが生えたのとか、あと木の細いのか、そういうのをつかまえつかまえ、ずーっと、海岸沿いを降りて行ったら、海岸沿いはまた案外すべすべの岩で、そこをみんなでどーっと歩いて、移動したんですけどね、結局夜だからみんな見えてないって感じじゃないですか。

で、だいたいもう100メートルぐらいも歩いたかな、そしたら照明弾が上がったんですよ。だつたつたつた、って、2つぐらい。で、上がったかと思ったらもう真昼みたいに、こう明るくなっちゃって。かと思ったら艦砲射撃です。ダダダダダって。最初のダダダダの時は、まだ私たちの周囲は10人に1人ケガしたかなぐらいで。

身をすくめているのを立ち上がって、「あ、終わった」って立ち上がって歩き出して、ものの10歩も歩いたかなってぐらいしたらね、もう1回ダダダダダって、艦砲射撃です。もうそのときは、私たちの周囲は、もう10人に1人立って歩けるぐらいで、みんなもう即死か…ばたばた倒れてケガしてるかで、もうそういう状態だったんですよ。

私たちは8人一緒だったんですけど、そのうち私のすぐ上の兄が即死で、姉の子供が、1歳何か月かだったと思うんだけど、おんぶされて背中即死で。そしてあとはね、姉の舅もいっしょだったんですよ。その舅はね、両足切断でもうちょこんとそこに座ってるんですよ。

私たちは、私ももう腕、全部傷。今でもこことか、こういうところ、戦争の時のケガなんですけどね。私より5歳ぐらい上の兄がいて、その兄は足で。そして、姉は右腕を貫通されちゃって。そして母はね、心臓の横にソラマメの豆粒ぐらいの大きさの弾が入って。そしてね、もう一人は全然無傷のアニキがいたんですよ。

2人はもう即死じゃないですか。そのまま置いてたら、そこはもう波が来て、波にさらわれる場所だから、護岸のところの岩と岩のあいだに押し込んで、できるだけ波がこないような場所にやって、私たちはそこを立ち去ったんですけど。その立ち去るときに、両足切断のおじいちゃん。おじいちゃんってもまだ40代だったと思うんだけどね、まだ、なんていうのかな、意識がちゃんとしてるんですよ。それで方言で「わん、うच्चる いちゅん なー？」(私を置いていくのか)って、もう私たちに声かけるんですけど、いまだにそれが耳についてんのかな。その声が聞こえてますね。

海岸沿いの岩陰に私たちを置いて、無傷なアニキはね、防衛隊行って帰って来てたんですよ。そしたら、昔はほらデマが行きかっちゃって、兵隊とか男の人たちは手とか足とかそぎ落として鼻とか全部そぎ落とされて、ひどい目に遭って殺されるんだとか。あと女の人は悪さされて殺されるっていうデマが行きかかってたんですね。だから「私はもう兵隊と一緒にここから移動するから、あなたたちはここにいなさい」って言って、私たち4人置いて、自分は立ち去ったんですよ。そしたら結局は、まあそのまま戻ってこなかったんですけどね。どこでどうなったかわからない。

●“捕虜”になる

で私たちは、翌日朝になったらね、ずうっと100メートルぐらい離れたところから拡声マイクで、「住民には何もいらないから出てきて捕虜にとられなさい」って歩いてたんですよ。「あ、じゃああの、出て行こうよ」ってやったら、まだ周囲に兵隊もいたんですね。別の兵隊が、「あなたたちはね、出て行ったら殺されるよ」って言うんですよ。殺されるよってつたつて、もうここでも飲まず食わずじゃないですか。もうなんにも持ってないし、じゃあ向こうは何もしないよって言うんだったら、10に1ぐらいは向こうは助かる見込みあるじゃない。ここだともう完全に死しかないじゃないですか。じゃあ出て行こうよって、出て行った。

●艦砲ぬ喰(く)えー残(ぬく)さー

昔、「艦砲ぬ喰(く)えー残(ぬく)さー」という流行歌が流行ってたんですよ。それは艦砲射撃の食べ残しだよという言葉なんだけど。私も、あなたも、おれも、艦砲の喰い残しなんだよーと。

(取材日:2012年2月6日)